

M-GTA 研究会 News Letter No.86

編集・発行：M-GTA 研究会事務局(立教大学社会学部木下研究室)

メーリングリストのアドレス: grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ: http://m-gta.jp/

世 話 人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、
佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、
林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇第 78 回定例研究会報告

【第 1 報告】 2

柴原 友範: 中小企業の急速な国際化における外部専門家の支援プロセス

【第 2 報告】 12

有野 雄大: 性犯罪受刑者に対する効果的な指導・支援の在り方に関する一考察
—性犯罪受刑者が性加害によって財を手に入れようとするプロセス
の分析から—

【第 3 報告】 20

佐々木 秀夫: 精神障害者小規模作業所の特徴と意義について
—精神障害者小規模作業所運動の第一世代が精神障害者と一般
社会を繋ぐ連携を作り出したプロセスから—

◇近況報告(領域／キーワード)(五十音順) 28

野中 光代 (看護学研究科地域看護学／知的障害者)

増田 昌幸 (経営学／人材と組織)

◇第 79 回定例研究会のお知らせ 29

◇編集後記 29

◇第78回定例研究会報告

【日 時】2017年1月28日(土)13:00～18:00

【場 所】国際基督教大学 本館 H-116

【出席者】73名

浅川 雅美(文教大学)・阿部 正子(長野県看護大学)・有野 雄大(川越少年刑務所)・安齋 久美子(帝京科学大学)・伊藤 尚子(名古屋大学)・伊藤 恵(新潟大学)・稲妻 伸一(山形家庭裁判所)・上原 美子(埼玉県立大学)・牛窪 隆太(関西学院大学)・小倉 啓子(ヤマザキ学園大学)・長田 知恵子(聖路加国際大学)・風間 眞理(目白大学)・梶原 はづき(立教大学)・片山 玲子(放送大学)・亀崎 明子(山口大学)・唐田 順子(国立看護大学校)・川上 由貴(日本体育大学)・河本 恵理(山口大学)・菊地 真実(早稲田大学)・北村 雅昭・木下 康仁(立教大学)・日下 慶子(京都大学)・久保 祐(目白大学)・倉田 貞美(浜松医科大学)・栗原 あゆみ(星槎大学)・後藤 喜広(東邦大学)・小林 深吾(法政大学)・齊藤 葉子(日本社会事業大学)・坂井 真愛(川崎医療福祉大学)・坂田 美枝子(豊橋創造大学)・佐川 佳南枝(熊本保健科学大学)・佐久間 浩美(了徳寺大学)・佐々木 秀夫(慶應義塾大学)・佐鹿 孝子(埼玉医科大学)・佐野 雪子(浜松医科大学)・篠崎 一成(公益社団法人全国宅地建物取引業協会連合会)・篠原 裕子(地域包括支援センター)・柴原 友範(筑波大学)・杉本 美陽(横浜商科大学)・鈴木 優菜(国際医療福祉大学)・清野 弘子(日本通運株式会社)・園川 緑(帝京平成大学)・高野 真弓(国際医療福祉大学)・高橋 由美子(岐阜聖徳学園大学)・高橋 暢介(在宅リハビリテーションセンター草加)・竹下 浩(職業大)・田中 満由美(山口大学)・谷田 悦男(星槎大学)・千葉井 鳴美(女子栄養大学)・辻村 真由子(千葉大学)・坪井 陽子(山口大学)・都丸 けい子(聖徳大学)・中西 良美(ルーテル学院大学)・長山 豊(金沢医科大学)・西巻 悦子(昭和女子大学)・根本 愛子(国際基督教大学)・野中 光代(愛知県立大学)・林 葉子((株)JH産業医科学研究所)・藤井 律子(国際医療福祉大学)・藤田 紀勝(職業能力開発総合大学校)・古澤 洋子(岐阜聖徳学園大学)・前田 和子(茨城キリスト教大学)・正木 啓子(国際医療福祉大学)・増田 昌幸(東京工業大学)・三浦 美和子(和歌山県立医科大学)・三ツ橋 由美子(国際医療福祉大学)・柳井 康子(白百合女子大学)・山崎 浩司(信州大学)・山本 三樹雄(豊橋創造大学)・山本 容子(東邦大学)・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・若林 馨(国際医療福祉大学)・渡辺 陽子(尾道市立市民病院)

【第1 報告】

柴原友範(筑波大学大学院ビジネス科学研究科博士後期課程)

Tomonori SHIBAHARA : Graduate School of Business Sciences, University of Tsukuba

中小企業の急速な国際化における外部専門家の支援プロセス

The support process of outside experts in SMEs' internationalization

1. 研究の背景と研究目的

近年の企業を取り巻くグローバル化の進展、情報化の急速な発展などの外部環境変化と、企業の経営資源の有効利用、国際的な知識の蓄積などの内部環境の変化により、中小企業の国際化が進んでおり、日本においても、直接投資、直接輸出を行う中小企業は増加傾向にある。一方、国際ビジネス分野の先行研究では、1990年代以降、それまでの大企業の多国籍化を前提とした段階的国際化プロセスでは説明できない中小企業の急速な国際化を対象に、ボーングローバル企業(Born Global Company:以下「BGC」と表記する)¹に関する研究が急速に増大し、この分野の理解に多くの示唆を与えている。またBGCの研究の前提条件として、設立から数年以内に海外活動に従事する企業を分析の対象としているが、現実には、創業から何十年も経過してから突然国際化する企業もあり、ボーン・アゲイン・グローバル企業(Born-again Global Company)という。ボーン・アゲイン・グローバル企業のタイプには、①買収や提携、事業転換などの特定のインシデントをきっかけに急激に国際化するタイプと、②特定のインシデントがないにもかかわらず、設立から何十年も経過してから、突然国際化するタイプがあるが、それらの戦略行動はいまだ十分に解明されているとは言えない(高井・神田, 2012)。

柴原(2016)は、これらの先行研究では説明できなかった近年の日本の中小企業の急速な国際化について、外部資源としての外部専門家を活用することで急速な国際化を実現した事例を報告している。これにより、外部専門家の活用が、近年の中小企業の急速な国際化を説明する1つの鍵となることがわかったが、互いに面識のない(文脈を知らない)専門家を効果的に活用することはそう簡単ではなく、中小企業等が、そうした外部専門家をいかに有効に活用できるか、また逆に専門家がいかに効果的に企業を支援できるかが鍵となる。

そこで本研究では、中小企業が外部専門家を活用して急速な国際化を図る中小企業の複数の事例を対象に、専門家とその利用企業の相互作用に着目し、双方の視点から分析するため、定性的に分析することによって具体的な支援プロセスを探索的に分析する。

2. M-GTA に適した研究であるか

本研究は、以下の点で、M-GTAの理論的特性(木下, 2007)と合致している。

- ① 自力では海外展開できない中小企業を専門家が支援するという「実践的領域」で、先行研究の蓄積が少ない分野における理論化を目指している
- ② 専門家が支援という行為を提供し、利用企業も行為として応えるという、定量的分析では説明が難しい「社会的相互作用」を対象としている

¹ Born Globals (Knight, 1996), Global Start-ups (Oviatt & McDougall, 1994)などの名称で呼ばれている

- ③ 進度に応じて専門家の支援内容が変化する「プロセス性」をもっている
- ④ 今後中小企業の海外進出が増加する中で「実践的応用」を目指している

3. 研究テーマおよび分析テーマへの絞り込み

研究の出発点(修士研究計画)は、「外部専門家による中小企業の国際化支援がうまく行くケースもあれば、行かないケースがあるが、その要因は何なのか」という疑問であった。当初は、「専門家の能力・経験」や「企業との相性・マッチング」なども想定されたが、事前調査するなかで、専門家の支援姿勢や支援プロセスが大きな影響を与えていることが見えてきたことから、「中小企業の急速な国際化における外部専門家の支援プロセス」という研究テーマに設定した。

分析当初は、支援の成功と失敗を含めた支援メカニズム全体を抽出しようとしたが、事前調査および初期段階の分析の結果、①成功例と失敗例では、そもそも調査協力者も異なる(しかも現実的には、成功例については比較的データが取りやすいが、失敗例については十分なデータの取得が困難な上、公開の同意が得られない可能性も高い)こと、②分析においても焦点がぼやけてしまうこと、③まずはよりシンプルな成功のためのプロセスの方が、実践への応用しやすい(失敗パターンは含まれないものの、プロセスの中には失敗しないために専門家が制御や留意している点などについては分析に含まれるため、実務的な有用性がある)ことなどの理由から、分析テーマは、「中小企業の急速な国際化において有効に作用する支援プロセスを明らかにする」と絞り込んだ(失敗パターンを含めた全体メカニズムについては、十分なデータが集まれば、今後の研究課題としていずれ取り組みたいと考えている)。

一方で、実践への応用を想定し、中小企業の業種、規模、進出先国、進出段階などにかかわらず共通して有効に作用する支援プロセスを明らかにするため、業種、規模、進出先国、進出段階については限定しなかった(むしろ、ある程度網羅的にばらつきがあるように理論的サンプリングを行った)。

4. インタビューガイド

本研究は、外部専門家を活用して急速な国際化を図る中小企業の成功事例を対象に、双方の視点から分析するため、各専門家および各企業向けにインタビューを実施した。インタビューは、原則、以下の質問項目に沿って実施した。ただし半構造化インタビューであるため、回答状況によって、適宜、深掘りした質問の追加や、質問の省略を行いながら実施した。また、インタビューの中では、専門家と企業それぞれに対し、自らの行動や考えだけでなく、相手の行動やその行動に対する自らの反応や考えについても聞き出すことにより、事実の裏付けと相互作用における認識の異同を探った。

質問項目(専門家向け)

- 1) 専門家になる前のキャリア、応募動機について
- 2) 具体的な助言・支援内容について
- 3) 支援する上で心がけている点について

- 4) 今後海外進出する企業へのメッセージについて
 質問項目 (利用企業向け)
- 1) 日本での事業概要、海外での事業計画について
 - 2) 海外事業計画の「きっかけ」と進捗状況について
 - 3) 専門家の具体的支援内容について (活用のメリット、成果なども含めて)
 - 4) 今後の海外展開のビジョン、夢、期待することについて

5. データ収集法と範囲

データの収集方法としては、インタビュー調査とホームページ等各種公開資料の二つである。インタビュー調査については、2014年2月から2015年2月の期間で、事前に研究利用に同意のあった利用企業の代表またはプロジェクト責任者とそれを支援する専門家に対して、半構造化インタビューを実施した。当日は聞き役1名(ライター)、書き手2名(広告会社担当者、ジェトロ担当者)で実施した。また、了解を得て録音し、逐語録を行った。公開資料としては、各企業のホームページの会社概要、沿革や、ジェトロの「新興国進出個別支援サービス利用事例集」などを参照した。

データの範囲については、中小企業の業種、規模、海外展開対象国などにかかわらず共通して有効に作用する支援プロセスを明らかにするため、業種、規模、海外進出先国、進出段階については限定せず、ある程度網羅的にばらつきがあるように理論的サンプリングを行った。

具体的な調査協力者としては、日本貿易振興機構(ジェトロ)が海外進出に取り組もうとする中小企業等に対し、海外経験豊富なシニア人材を専門家として派遣し個別に海外進出を支援する「専門家による新興国進出個別支援サービス」の利用企業とそれを支援する専門家を研究対象とした。本研究は有効に作用する支援プロセスを明らかにするのが分析テーマであるため、支援事例のうち、支援の結果として専門家に対する満足度が高く、支援期間中に拠点の設立や契約締結などの

企業	所在地	設立	従業員数	資本金	企業業種	企業業種詳細	進出先	支援時の進出段階				専門家	出身業種 *1	支援成果	
								投資 検討	意思 決定	立ち 上げ	操業 開業			満足 度 *2	拠点 設置 *3
1. A社	愛知県	1963年	688名	1000万円	非製造業	広告制作	マレーシア			○	○	a専門家	製造業	5	○
2. B社	三重県	1956年	非公開	5,000万円	非製造業	建設・工事	ミャンマー			○	○	b専門家	非製造業	5	○
3. C社	千葉県	1969年	64名	2000万円	製造業	ゴム製造	ベトナム			○	○	c専門家	製造業	5	○
4. D社	東京都	1956年	82名	5000万円	製造業	精密切断機製造	タイ	○	○	○		d専門家	非製造業	5	○
5. E社	愛知県	1938年	265名	1億4,700万円	製造業	鉄鋼	メキシコ			○	○	e専門家	製造業	5	○
6. F社	東京都	1971年	135名	5000万円	非製造業	コンサルティング	ベトナム	○	○			f専門家	非製造業	4	△
7. G社	兵庫県	1967年	非公開	3,750万円	製造業	機械部品製造	タイ	○	○	○		g専門家	製造業	5	○
8. H社	兵庫県	1994年	310名	1000万円	非製造業	ビルメンテナンス	マレーシア	○	○	○		h専門家	製造業	4	△
9. I社	茨城県	2002年	非公開	3,450万円	製造業	機械部品製造	ベトナム				○	i専門家	製造業	5	△
10. J社	大阪府	1976年	非公開	2,900万円	製造業	洗剤・清浄剤	インドネシア	○	○			j専門家	製造業	4	△

*1: □メーカー系商社は製造業、□総合・コンサルタント等は非製造業とした。は

*2: □ジェトロが実施したアンケート (5段階、5が最高) のうち、「全体的に専門家と信頼関係を築くことができた」への回答について企業の了解を得たものを記載。未回答の場合は、口頭で確認した。

*3: □支援期間中に拠点設置に成功 (登記、□開業) した場合は○、□未設置とした。□

成果に結びついた、あるいは拠点設立等にむけてプロジェクトが進展した事例を取り上げた。まず、業種、進出先、進出段階などのバランスをみて4件を抽出し、その後分析を加えながら理論的サンプリングにより事例を追加し、最終的に10件の事例について、それぞれ利用企業、専門家のインタビュー・データと公開データを分析した。各事例の概要については以下の表に示した。

6. 分析焦点者の設定

分析焦点者については、分析初期段階においては、「専門家」や「利用企業」に設定して分析を試してみたが、双方の視点を反映した支援プロセスを抽出するためには、一方を焦点とした分析だけでは限界を感じたため、最終的には、分析対象者を「専門家と利用企業の相互作用」に設定した。

具体的には、専門家および利用企業の具体的な行為や心理的反応について、それぞれどのような意図があり、それがどのように受け取られ、それがさらにどのような行為や反応につながって相互に作用するののかということについて、少し俯瞰した視点(焦点)から分析を行った。なお、木下(2007)も、「習熟をしてくれば、社会的相互作用自体に設定することも可能」としている。

7. 分析ワークシート

回収資料①参照。なお、企業と専門家双方の逐語録のコード化には、質的分析ソフトウェア(VERBI社のMAXQDA11)を使用した。

8. カテゴリー生成

分析の結果、10 事例について、それぞれ利用企業と専門家のインタビュー、および公開資料の

	定義	区分基準
【文脈の認知・信頼】	対話や観察などを通じて、相手の 現状 や過去の経緯などの文脈を読み取り、その中で相手に対する信頼を蓄積していく	-
【コミットメント】	互いの信頼を基盤として、何らかの言動により相手に対するコミットメントを示す	心理的一体化前であり、観察から具体的な言動に移ったかどうかで区分
【心理的一体化】	互いに強固な信頼関係が結ばれて 心理 的に一体化し、単なる業務上のパートナー以上の精神的な絆が 生 まれる	互いに「探り合い」などの必要がない快適な 状態 かどうかで区分
【創発による支援の深化】	異分野知識 の融合や共同作業などが連続的あるいは同時進行で 発生 することで、支援が一気に深化する	心理的一体化後の支援あるいは共同作業かどうかで区分
【支援の成果】	支援により海外展開プロジェクトそのもの、経営者自身、スタッフに対する成果が 現 れる	支援の結果として 現 れた成果かどうかで区分

合計 30 文書から、32 個の概念と 503 個の具体例が抽出された。そのうち具体例の数が少ない概念、類似する概念を廃止または統合した結果、最終的に 24 個の概念と合計 501 個の具体例が採用された。そして、それぞれの具体例の文脈に戻って分析を行い、各概念の行為主体(利用企業、専門家、両者の協働)、互いの心理的距離、相互作用の内容に応じてカテゴリー化をおこなった。なお、カテゴリー化においてデータ・リソース(専門家、あるいは利用企業、公開資料)は考慮しなかった。

その結果、二つの文脈に関するカテゴリー(【利用企業の文脈】、【専門家の文脈】)と、五つの支援プロセスに関するカテゴリー(【文脈の認知・信頼】、【コミットメント】、【心理的一体化】、【創発による支援の深化】、【支援の成果】)が生成された。さらに、【利用企業の文脈】、【専門家の文脈】、【文脈の認知・信頼】、【コミットメント】については、行為主体別(専門家／利用企業)にそれぞれ2つに分類した。一方で、【心理的一体化】、【創発による支援の深化】、【支援の成果】については、両者の協働であり、心理的にも一体化しているためそれぞれ1つのカテゴリーとなった。

9. 結果図およびストーリーライン

カテゴリー間の関係について再度文脈に戻って、時系列、因果関係、心理的距離、支援プロセスの進捗の方向に着目しながら再文脈化を行った。特に全ての事例で抽出された「心理的一体化」に着目し、「心理的一体化」に至るまでのプロセスと、「心理的一体化」が支援の成果に結びつくプロセスという観点で深掘りした。

その結果、①まず、利用企業と専門家が互いの文脈を十分に認知した上で信頼を蓄積し、②次に、互いにコミットメントを交換することにより、徐々に両者の心理的距離が縮まり、③やがて、心理的に一体化し、④そこから創発的に支援が深化して、⑤具体的な成果につながるという 5 つのフェーズからなる支援プロセスが浮かび上がった。

次に、ストーリーラインから概念図を創出し、「外部専門家による国際化支援プロセスの概念モデル」を提示した(回収資料②参照)。同図の横軸は支援プロセスの進捗を示し、右に進むほど支援が進んでいくことをあらわす。一方、縦軸は心理的距離を示し、上下に離れるほど心理的に隔たりが大きく、中央で統合しているのは、心理的に一体化している状態をあらわす。なお、解釈の妥当性を高めるため、M-GTA による分析の経験を持つ研究者のチェックを受けるとともに、調査対象者に結果を伝え、疑問や異論がないことを確認した²。

10. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、またいつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性はどう考えたか。

分析の際は、質的分析ソフトウェア(MAXQDA11)と手書きの理論的メモ・ノートの両方を必ず用意して実施した。概念の生成は、質的分析ソフトウェア(MAXQDA11)上で実施しながら、概念に関

² M-GTA 研究会世話人に本稿についてコメントをもらい、反映した。また、本稿の概要について調査協力者(企業、専門家)全員に報告したところ、内容について特段の異論、疑問はなかった。なお、専門家1名については、調査後まもなく他界されたため、本人への確認はできなかった。

わる着想やアイデアをソフトウェアのメモ機能を利用して記録した。同時にカテゴリー化や概念図についてのアイデアが浮かんだ場合は、別途、理論的メモ・ノートに手書きで記録した。概念図については、ある程度まとまった段階で、パワーポイントで作成して保存した。分析を実施している際は、実際の分析時以外も常に頭の中の一部で研究のことを考えていたため、移動中、シャワー中、就寝中に、突然アイデア(主にカテゴリーの関係性などのイメージ)が浮かぶこともあったため、常に手書き理論的メモ・ノートを携行して、浮かんだアイデアのイメージを手書きで記録した。現象特性としては、中長期的に海外展開などの企業変革を支援する場合、解決策を提示する前に互いの文脈を十分に認知した上で相互信頼関係を築かない限りは、有効な支援にも繋がらないと考える。

11. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など M-GTA に関して理解できた点

- ・分析においては、分析テーマと分析焦点者が非常に重要である点について再認識した。
- よく理解できない点・疑問点
- ・分析は、木下(2003,2007)を参照しながら実施したが、分析手順(お作法)、留意点について、改めて一通り勉強したい。
- ・M-GTA の研究については、看護、医療分野等での蓄積が圧倒的に多い一方で、経営分野での蓄積が少ない理由。また、経営系で投稿・発表する際の査読者の視点の違いや、留意点があれば知りたい。
- ・本研究成果(結果図等)を実践に応用した上で、概念モデルの検証を行うための質問紙調査(回収資料③)を実施したいが、その調査結果を活用して実証する記述方法、参考論文などがあれば教えていただきたい。

12. SV・会場からのコメント・質問応答の概要

■ 「分析焦点者」について

- ・分析焦点者については、「相互作用」ではなく、「専門家」、「企業(経営者)」のどちらかの視点で(相手の考えがわからない中でどのように考え、行動したのか)分析をした方が深堀できるし、それぞれで論文化も可能。その上で、改めて両者の視点を合わせた形で相互作用をプロセスにして博論にしてもよいのではないかと。
- ・特に、それぞれの視点で、どのようにしたら、どの時点から心理的に一体化したのかそのターニングポイントについて、具体的に深堀できたら面白いのではないかと。
- ・分析焦点者として、「成功した専門家」に限定することはありだと思う。その中で過去の失敗経験などを踏まえた行動などが分析できればよい。

■ 「相互作用」について

- ・「相互作用」は、「専門家と企業(経営者)との相互作用」にフォーカスするのはよいが、それだけではなく、「専門家の内面での過去の経験との相互作用」や「企業経営者と部長等関係者との相互作用」なども含めて分析すると更にいろいろなことが見えてくるのではないかと。

■ 「分析ワークシート」「データ収集」について

- ・対極例としては、「失敗」だけではなく、別の意味での対極例がないか思考してみるとよい。
- ・項目として、「カテゴリー」があるのは、「違和感」がある。
- ・1対1で追加インタビューができれば、自己開示したコメントが収集できるのでは。

■ 「結果図」について

- ・概念名が心理的(抽象的)なので、実務家にイメージがしにくく有用性にかけるのではないかな。もっと具体的にイメージしやすい概念名にするとぐっと印象が変わるのではないかな。
- ・フェーズ3、4間でぐるぐる回るところをもう少し細かく書いてはどうか。
- ・成功のためのプロセスというのは理解できるが、やはり失敗への分かれ道がわかったほうが、実務的にも有用だと思う。

■ M-GTA について

- ・M-GTA は、技法と思想とがセットになった分析法であり、困っている人を助けるヒューマンサービスをインタビュー、コード化により明らかにする。

■ その他の質疑応答

- ・今回の調査対象となる専門家の資格は？
→ジェトロが一定の基準(海外、中小企業支援経験等)により審査・契約した専門家
- ・中小企業の定義は？
→中小企業法上の定義(従業員数、資本金)を採用

13. 発表会を終えて(感想)

このたびは新参加者にもかかわらずM-GTA 定例勉強会における貴重な発表の機会を与えていただいたことを感謝するとともに、大変お忙しい中、電話セッション、メールを通じて大変丁寧にご指導をいただきました竹下先生、発表会で大変有意義なコメントをいただいた林会長をはじめとした会員の皆様に心より御礼申し上げます。M-GTA については、周りに経営学の分野で利用している仲間がおらず、木下先生の書籍だけを頼りに研究を進めてきたため、これまで何気なく使っていた「分析テーマ」、「分析焦点者」、「社会的相互作用」などの用語に対する正確な定義やこだわり方など書籍だけではわからない部分について発表を通じて体感することができました。また、結果図についてもより有用性を高めるためのヒントをいただきました。そして、発表会後にも、M-GTA 専門家の皆様からご助言とともに期待と励ましの言葉をいただいたことが何よりも自信になり、今回勇気を出して発表させていただいてよかったと感じるとともに、今後も研究に精進してまいりたいと思います。

〈文献リスト〉

- Bell, J, McNaughton, R & Young, S. (2001) Born-again global firms: An extension to the born global phenomenon, *Journal of International Management*, 7, 173-189.
- Cavusgil, S. T., & Knight, G. (2009) *Born global firms: A new international enterprise*. Business expert

press.

Eisenhardt, K.M. (1989a) Building theories from case study research. *The Academy of Management Review*, 14 (4), 532-550.

Freeman, S., Edwards, R., & Schroder, B. (2006) How smaller born-global firms use networks and alliances to overcome constraints to rapid internationalization. *Journal of international Marketing*, 14 (3), 33-63.

Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1967) *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago, IL: Aldine.

Hannan, M., & Freeman, J. (1984) Structural inertia and organizational change. *American Sociological Review*, 49, 149-164.

Hedlund, G., & Kverneland, A. (1985) Are strategies for foreign markets changing? The case of Swedish investment in Japan. *International Studies of Management & Organization*, 15 (2), 41-59.

Jolly, V. K., Alahuhta, M., & Jeannet, J. P. (1992) Challenging the incumbents: How high technology start-ups compete globally. *Strategic Change*, 1 (2), 71-82.

木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践: 質的研究への誘い』弘文堂.

木下康仁 (2007)『ライブ講義-M-GTA 実践的質的研究法: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.

Knight, G. (1996) *Born global*. Wiley International Encyclopedia of Marketing

森田正人 (2014)「ボーングローバル企業研究の現状と今後の課題」『横浜国際社会科学研究所』18 (4), 83-99.

中村久人 (2013)『ボーングローバル企業の経営理論: 新しい国際的ベンチャー・中小企業の出現』八千代出版.

Oviatt, B. M., & McDougall, P. P. (1994) Toward a theory of international new ventures. *Journal of International Business Studies*, 25 (1), 45-64.

佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.

Sharma, D. D., and Blomstermo, A. (2003). The internationalization process of born globals: A network view. *International Business Review*, 12 (6), 739-753.

柴原友範 (2016)「内部資源に乏しい企業の急速な国際化における外部専門家の役割と利用企業の満足要因について」『第22回国際ビジネス研究学会全国大会報告要旨』国際ビジネス研究学会, 100-103.

高井透・神田良 (2012)「ボーン・アゲイン・グローバル企業の持続的競争優位性に関する研究」『情報科学研究』21, 5-32.

高井透 (2008)「ボーン・グローバル・カンパニー研究の変遷と課題」『国際ビジネス研究の新潮流』中央経済社, 125-149.

竹下浩 (2009)「中国進出プロジェクトにおける外部専門家の支援プロセス」『経営行動科学』22 (1), 21-33.

山岸俊男 (1998)『信頼の構造—こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.

吉原英樹 (2002)『国際経営論への招待』有斐閣ブックス

【SV コメント】**竹下 浩（職業能力開発総合大学校）**

興味深いご研究で、勉強になりました。NL 読者のご参考に、思い出したことを略述します。まずは、分析テーマ。以下、判り易い様に、単純化した架空の例でご説明します。研究テーマ「外部専門家による中小企業の海外進出支援過程」（論文 3 本）から分析テーマ（個別論文）に絞る段階で、自分の思考（心の構え）を確認する（手法を選ぶ）必要が生じます。

【タイプ1】

目的：海外未経験の中小企業オーナーに、成功する外部専門家の使い方を示したい。

興味：成功を導くやり取りをパターン化したい。因子分析で成功への影響を実証したい。

分析：企業が成功に寄与したと認めた専門家の行動を抽出して、分類する。

収集：専門家と企業と同時に聴取、成功に結びつく行動だったか確認する。

【タイプ2】

目的：公的制度に参加する企業 OB に、どんなことに直面するか示す見取り図を示したい。

興味：悩み・工夫するプロセス（必ずしも成功に結びつかないが参考になる）を見たい。

分析：そこで起きている当事者間の現象を解釈し、分析焦点者にとっての意味づけを行う。

収集：1 対 1 でラポールを形成、本人が気付かないことも含めて掘り下げていく。

ここで、タイプ1なら他の手法（引用された佐藤・QDA 法等）、2なら M-GTA を用います。

分析ワークシートで説明します。手順②「着目」、手順④「着目理由」で「分析焦点者にとってこの現象の意味は何か（なぜそうしたのか？）」「考えるには分析者のシエマ（問題意識と関心、知見）を使いますが、⑥「多様な解釈可能性検討」⑦「他の具体例探し」では、「解釈とデータが一致しているか（他の可能性は無いか？）」「逆方向に確認します。その後はシエマによる解釈とデータによるシエマの修正との繰り返しです。分析ソフトでは代替できず、誰も知らない作業です。自分で最後まで繰り返すしかありません。例えば、「休日も付き合うことで企業の信頼感を形成した」と聞けば、M-GTA なら専門家に「なぜそんなに献身的に支援したのか」「全ての相手にそうするのか」、企業側担当者に「献身的でなくても（知見の深さや予測が的中したこと）信頼感を形成した例は無いのか」、聞きたくなります。相手側が同席しては答え辛いので、後日個別インタビューをする（2つの分析テーマ）でしょう。逐語記録を作成しながら、呼吸や間、口調によって「ここはなんか言いたそうだったな」「違う意味がありそうだ」（次に訊こう！）と気付けば、コメント欄に記入します。「かつての部下を所長候補として紹介／地元政府の局長にまだ前線だとを示す、が喜びに？→公的支援特有の（利他的な）現象特性が浮上するかも…」と思ったら、理論的メモに記入します。対照的に、タイプ1は樹形図で後ろ（成功）から 1 本の線を辿っていくので、他の分岐と理由は検討しません。M-GTA からすれば「成功する専門家の行動が見つかった」だけでは理論的飽和にならないので、追加データが必要になります。採れない場合、他の手法を検討します。このように、研究目的や興味（思考）と分析（技法）は、セットなのです。

以上、少しでもお役に立てば幸いです。ご研究のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

【第2 報告】

有野 雄大 (川越少年刑務所)

Yudai ARINO : Kawagoe Juvenile Prison

性犯罪受刑者に対する効果的な指導・支援の在り方に関する一考察 ―性犯罪受刑者が性加害によって財を手に入れようとするプロセスの分析から―

An examination of effective intervention for sexual offenders in correctional institutions : Implications from process analysis how they obtain “goods” through offenses

1. 研究テーマについて

研究者は、刑務所に勤務する法務教官である。法務教官とは、少年院や刑務所に収容されている者に対して再犯防止のための教育を実施するものである。中でも研究者は、性犯罪をして刑務所に収容されている者に対する教育(性犯罪再犯防止指導)を担当している。

研究者は、2年前の法務省勤務時代に薬物依存症者の社会復帰支援に関する業務を担当していたが、ある学会で、国立精神・神経医療研究センターの松本俊彦先生が講演された「自己治療仮説」に感銘を受けた。自己治療仮説とは、米国の依存症専門医であるエドワード・E・カンツィアンとマーク・E・アルバニースが1974年に提唱した臨床概念であり、人が物質摂取に耽溺してしまうのは、それが精神的苦痛を軽減したり、取り去ったり、変化させたりするという効果が強いからである、というものである。その後研究者は現在の職場に異動し、性犯罪受刑者に対する教育に専従するようになったが、ある時、この自己治療仮説は性犯罪にも応用できるのではないかと、すなわち、性犯罪受刑者も何らかの生きづらさを抱えていて、それにコーピングするために性犯罪をしたという側面があるのではないかと考えるようになった。

また、性犯罪(受刑)者の処遇において近年注目されている理論として「グッド・ライブズ・モデル」というものがある。これは、内的・外的な資源の不足により、向社会的な手段を取れないにもかかわらず、「財」、すなわち基本的ニーズや一般的な人生目標を達成しようとする際に生じるのが犯罪であるので、知識、技能、機会の付与等により、向社会的な手段が取れるように方向付ければ犯罪は起こさないという考えを基本に置くものである。日本の性犯罪受刑者に対する教育は必ずしもこのグッド・ライブズ・モデルを取り入れたものではないが、研究者が日ごろ実施している教育において寄って立つ理論としている。本研究においてもこの理論を基軸に据え、不適切な手段、すなわち性加害によって達成しようとしたものは何かという問題意識につながっている。

2. M-GTAに適した研究か

当初は性犯罪受刑者が抱える生きづらさに焦点を当て、そのコーピングとして性加害を行うというプロセスを明らかにしたいという思いから、多くの対象者から回答を得られる量的研究を行うことを考えていた。しかし、次第に、量的研究では捨象されてしまうおそれのある、性犯罪受刑者にとっての性加害の意味に焦点を当てたいと考えるようになり、性犯罪受刑者が性加害という不適切な手

段によって求めたもの、また、そのプロセスを明らかにするためには質的研究が適していると判断した。中でも、性犯罪受刑者の語り(データ)に密着した分析ができること、性犯罪受刑者が性加害によって「財」を達成しようとする現象がプロセス的性格をもっていること、臨床から性加害は本人とその生活環境との相互作用に影響を受けることが明らかであり、社会的相互作用に焦点を当てることができること、性犯罪受刑者に対する効果的な指導や支援の在り方について実践的な示唆を得ることが期待されることなどから、M-GTAを用いた質的帰納的研究とすることとした。

3. 分析テーマへの絞り込み

文献を読み、分析テーマには「プロセス」という言葉を入れた方が良いという意識があったため、当初は漠然と「性犯罪受刑者が性加害をするに至ったプロセス」とした。これで、性犯罪受刑者が事件当時に何らかの生きづらさを感じており、それに対してコーピングをとうとうとしたがうまく対処できず、性加害に手を染めてしまったという過程をカバーできるものと考え、分析していた。

しかし、SVから、「至ったプロセス」はあくまで性加害をするまでのことであり、(焦点を当てたかった)「性加害によってもたらされたもの」は後のことではないかと極めて重要な指摘を受けた。そこで、分析テーマを「性犯罪受刑者が性加害によって財を手に入れようとするプロセス」に修正し、概念が妥当か見直しているところである。

4. インタビューガイド

インタビューガイドは、カンツィアンとアルバニースが著した『人はなぜ依存症になるのかー自己治療としてのアディクションー』を参考に作成した。

- ①事件当時どのような生活を送っていたか。
- ②事件当時どのような困難や悩みがあったのか。
- ③困難や悩みに対処するためにどのようなことを試したのか。
- ④どのようにして性加害にたどり着いたのか。
- ⑤性加害に何を求めているのか。
- ⑥性加害によって何を得たのか。性加害がもたらしたものは何か。
- ⑦事件当時必要としていたものやあった良かったものは何か。

を基本的な質問項目として質問し、ほかは自由に語ってもらう半構造化面接とした。

5. データの収集法と範囲

データ収集は、研究者が所属する、犯罪傾向が進んでいない者を収容する刑務所に収容されている性犯罪受刑者であって、性犯罪再犯防止指導の受講を修了した者のうち、研究者がグループワークを担当した者 14 名に協力を依頼し、全員から協力を得ることができた。

同指導を修了した者としたのは、同指導を受講していない、または受講中の者に比して、性加害によって財を手に入れようとするプロセスや、手に入れようとした財が何であるかについての自己理解が進んでいると考えられたためである。また、研究者がグループワークを担当した者に協力を求

めた理由は、通常、自らが犯した性加害やその過程について初対面の者に赤裸々に語ることに抵抗が生じるものと想像されたため、研究者が同指導を通じてある程度の情報を承知している者に対してインタビューをする方が、より豊富な情報を得られると考えられたためである。協力を依頼した者全員から同意を得ることができたのは、同指導において研究者（指導者）やグループのメンバーを信頼して真実や本音を打ち明けることができたという体験が大きく影響しているのではないかと思われた。つまり、研究者との関係ができていること、自らの性加害やその過程について話すことへの心理的抵抗感が低減していることなどが奏功したのではないかと考えられた。この点は、一方で、研究者が期待する答えを誘導したり、そうでなくても、研究者の意図を汲み取って研究者が期待する答えを答えようとしたりするなどのデメリットも想定されたが、研究者の仮説を押し付けないう、オープンな姿勢でインタビューに臨むことである程度解消されたものと考えられた。

インタビューは、前記のインタビューガイドに沿って研究者が質問し、研究参加者に自由に語ってもらう半構造化面接によって行った。面接は一人1回行い、時間は平均48分であった。M-GTAのインタビューは多くが1時間半～2時間を想定しているが、刑務所の日課を考慮するとあまり長時間研究参加者を拘束することが難しいこと、研究参加者によっては話を深めることができずにインタビューが終わってしまった者もいたことから、このような時間となった。

面接内容は研究参加者の同意を得た上でICレコーダーに録音し、逐語録に起こした。録音については目立った抵抗を示す者がいなかったが、これには、受講者の同意を得た上で性犯罪再犯防止指導を毎セッション録音・録画していたので、インタビューに際しても心理的抵抗が低減していたこと、研究者が録音したデータの取扱いについて説明し安心を得られたことなどが考えられる。

研究参加者のインタビュー時の平均年齢は28歳（範囲22～41歳）、主たる罪名は強姦の者が9名、強制わいせつの者が5名、懲役刑の平均刑期は4年8月（範囲1年10月～8年）であった。

6. 分析焦点者の設定

分析焦点者は、「刑事施設に収容されている性犯罪受刑者」とした。

7. 分析ワークシート

会場にて配付し、回収した。

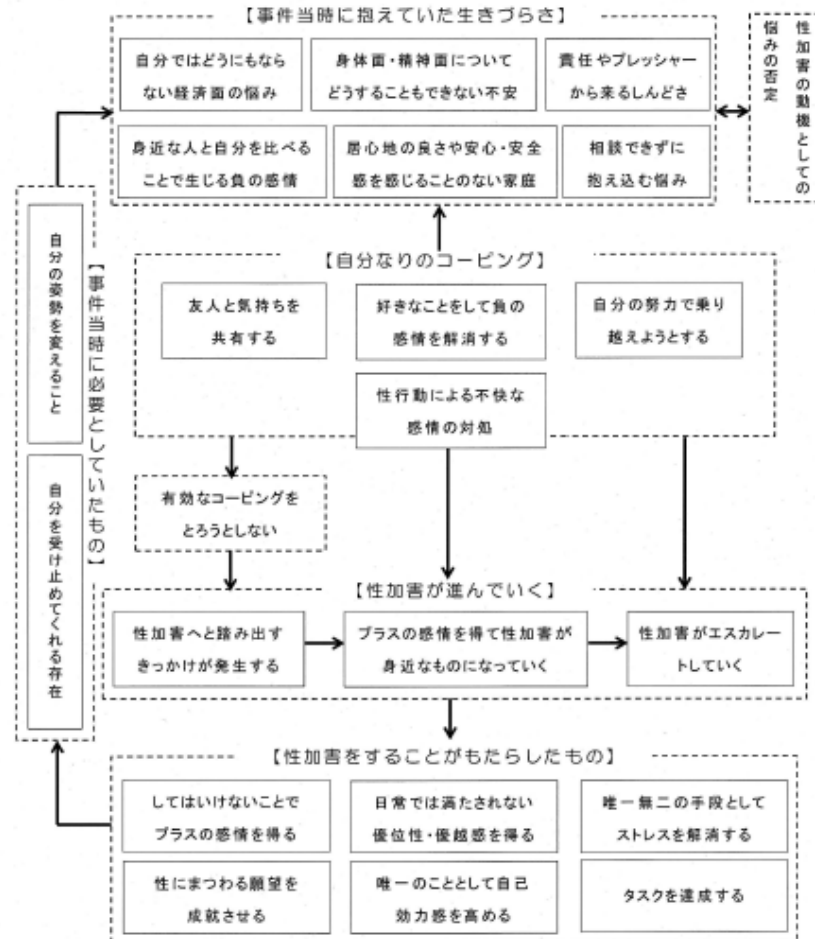
8. カテゴリー生成

先行研究をもとにインタビューガイドを作成し、性犯罪受刑者が性加害によって財を手に入れるプロセスが一人一人見えてきた。このイメージをベースにして、概念を生成していき、同じ段階に位置付けられそうなものをカテゴリーとしてまとめた。

（例）事件当時に感じていた困難や悩みという視点から概念を生成したところ、〈自分ではどうにもならない経済面の悩み〉、〈身体面・精神面についてどうすることもできない不安〉、〈責任やプレッシャーから来るしんどさ〉、〈身近な人と自分を比べることで生じる負の感情〉、〈居心地の良さや安

心・安全感を感じる事の出来ない家庭〉、〈相談できずに抱え込む悩み〉の6個の概念ができた。これらを【事件当時に抱えていた生きづらさ】というカテゴリーとして括った。

9. 結果図



10. ストーリーライン

研究参加者には、〈自分ではどうにもならない経済面の悩み〉、〈身体面・精神面についてどうすることもできない不安〉、〈責任やプレッシャーから来るしんどさ〉、〈身近な人と自分を比べることで生じる負の感情〉、〈居心地の良さや安心・安全感を感じる事のない家庭〉、〈相談できずに抱え込む悩み〉といった【事件当時に抱えていた生きづらさ】があった。ただし、中には性加害の動機としての悩みの否定をする者もいた。

彼らはこれらの生きづらさに対して、〈友人と気持ちを共有する〉、〈好きなことをして負の感情を解消する〉、〈自分の努力で乗り越えようとする〉といった【自分なりのコーピング】によって対処しようとしていた。ある者は、〈性行動による不快な感情の対処〉によって対処していたが、このことは性加害の一要因となっていた。

しかし、生きづらさとなっている根本的な原因に対して〈有効なコーピングをとろうとしない〉中で、

〈性加害へと踏み出すきっかけが発生する〉、〈プラスの感情を得て性加害が身近なものになっていく〉、〈性加害がエスカレートしていく〉という過程を経ながら【性加害が進んでいく】ようになり、今回受刑することとなった性犯罪をするに至った。

彼らに【性加害をすることがもたらしたもの】として、〈してはいけないことでプラスの感情を得る〉、〈日常では満たされない優位性・優越感を得る〉、〈唯一無二の手段としてストレスを解消する〉、〈性にまつわる願望を成就させる〉、〈唯一のこととして自己効力感を高める〉、〈タスクを達成する〉といったことがあった。

性加害という不適切な手段によることなくニーズを満たすために【事件当時が必要としていたもの】として、〈自分の姿勢を変えること〉と〈自分を受け止めてくれる存在〉が挙げられていた。

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。

当初の分析ワークシートの理論的メモ欄に記載された内容はとても貧弱なものであり、SVから、思い付いたこと、解釈の可能性をできる限り書き、「このような概念にたどり着いた」ということを読者・聴衆に納得させることが重要との指導をいただいた。理論的メモ欄には、ヴァリエーションから、研究協力者の感情や価値観を探り、これを記載するようにした。

現象特性は、生きづらさを抱えた人(性犯罪受刑者)が不適切な手段によって財を達成していくと考えた。

12. 分析を振り返って、M-GTAに関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など

木下康仁先生の御著書を何冊も読み、「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」と検索して出てきた論文に目を通しながらM-GTAのやり方を覚え、手探りで研究を進めていった。SVの御指導もあって、学会で中間的に報告することができ、現在は、学術誌への投稿を目標に論文を執筆しているところである。私自身、研究とは無縁な生活を送ってきて、本研究が人生初の研究であった。その方法としてM-GTAを選択したことで、自分なりに納得のいく研究ができていると思っているが、実際にはM-GTAを十分に理解できているかと言えばそんなことはないし、査読に耐えられる論文ができるかも心許ない。定例研究会で発表するというまたとない機会をいただけたので、忌憚のない御質問・御意見をいただき、M-GTAに対する理解を深めるとともに、研究の精度を高めていきたい。

〈引用・参考文献〉

D・リチャード・ローズ, トニー・ウォード著, 津富宏, 山本麻奈訳: 性犯罪からの離脱「良き人生モデル」がひらく可能性, 日本評論社, 2014

エドワード・J・カンツィアン, マーク・J・アルパニース著, 松本俊彦訳: 人はなぜ依存症になるのかー自己治療としてのアディクションー, 星和書店, 2013

榎本稔: 性依存症の治療, 金剛出版, 2014

藤森由子, 國方弘子: 地域活動支援センターに通所する精神障がい者のグループワークでの体験, 日本精神保健看護学雑誌 Vol.23, No.2, 2014

法務省法務総合研究所: 平成27年版犯罪白書, 日経印刷株式会社, 2015

法務省矯正局成人矯正課: 刑事施設における性犯罪者処遇プログラムの受講者の再犯等に関する分析研究報告書, 2012

木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, 弘文堂, 2003

小林桜児: 人を信じられない病ー信頼障害としてのアディクション, 日本評論社, 2016

性犯罪者処遇プログラム研究会: 性犯罪者処遇プログラム研究会報告書, 2006

浦田洋: 性犯罪者処遇の新しい流れー良い生活モデル(GLM)とは何か, 刑政第124巻第12号, 2013

ウィリアム・L・マーシャル, ヨーランダ・M・フェルナンデス, リアム・E・マーシャル, ジェリス・A・セラン著, 小林万洋, 門本泉監訳: 性犯罪者の治療と処遇 その評価と焦点, 日本評論社, 2010

(会場からのコメント概要)

- 生きづらさから性犯罪へ向かうプロセスと、性犯罪者がスキルを獲得して向社会性を獲得することを法務教官が支援するプロセスの二つがあるが、その人の認知の変容を扱うのは難しいので、後者の方が研究としてうまくいくのではないかな。
- 用語の定義として、「財」というものがよく分からない。財の中には精神的苦痛の軽減も含まれるのか。
- 対象者は初めから財を手に入れる目的があって、加害したのか。財はその人の中にあって、それを単にインタビューで引き出ただけではないかな。
- カナダの性犯罪者処遇プログラムはよくできていて、受講することで自己開示が進み、性加害によって得ようとしたものも言えるようになるようであるが、受講して性加害によって得ようとしたものを語ることができるようになった人にインタビューすると、プログラムの教育効果しか出てこないのではないかな。
- 自己治療仮説とグッド・ライブズ・モデルはどのように絡み合っていくのか。
- カナダのプログラムの成果については、文献を読み込み、説明できるような論文にしないといけない。日本と異なる部分については、M-GTAを用いて深く聞いていくことで、社会的相互作用によって説明できると思われる。
- 生きづらさ→コーピングに失敗→性加害という仮説を説明しようとしているのであって、それは質的研究とは言わない。M-GTAでできる性犯罪受刑者への支援プロセスなどを同僚にインタビューすると、M-GTAがどういうものか分かるので、その方が研究したいことに近づけるかもしれない。
- 薬物やアルコール依存症の人と性加害者を同じ依存症と考えてよいのか。前者は自分を傷付けたり家族に迷惑を掛けたりしているが、後者は何の関係もない人にダメージを与えている。そうならざるを得なかったプロセスと、それを振り返るプロセスを丁寧に扱ってもらいたい。そうしないと被害者は浮かばれない。

○M-GTAで生み出されるのは領域密着理論であり、その理論が通用する範囲というのが分析焦点者である。分析焦点者を「刑事施設に収容されている性犯罪受刑者」とすると、全般に当てはまる大理論になってしまう。明らかにしたいことが分析テーマであり、どの範囲についてかが分析焦点者なので、更に詰めていくと良い。

(感想)

これまでの人生で研究に携わったことがなかった私にとって、本研究は、人生初となる研究でした。2年間の刑務所への出向期間の成果を形に残したいという思いから始めた研究ですが、先行研究のレビューやM-GTAを含む研究方法についての理解が不十分であったことは言うに及ばず、そもそも何を明らかにしたいのかという研究の核心についても十分に定まっていなかったことを反省いたしました。今回は研究を発表させていただくことで、何事にも代えがたい学びの機会をいただくことができました。本研究をどう進めるかは引き続き検討していきたいと思いますが、今後も実務家として、実務に寄与する研究を続けていきたいとの思いを新たにすることができました。

最後になりましたが、発表の機会を御提供くださった研究会事務局の皆様、定例研究会で発表を聞いてくださり、貴重なコメントをくださった皆様、スーパーバイザーとなってくださった小倉啓子先生にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

【SV コメント】

小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）

はじめに

研究会用に準備していただいた資料は、問題意識・研究テーマ、M-GTA に適した研究か、分析テーマ、データ収集、ワークシート、結果図、ストーリーラインなどご研究全体に亘るものであった。しかし、発表の準備段階のSVの時に、私は分析テーマの設定や概念生成、結果などを論議する前に吟味したほうが良いと思われるいくつかの課題があると思った。それらを十分に検討しないまま先を急ぐと、本研究は何のために何を明らかにするのか、どの学問領域のどこに位置づけるのか、M-GTA を用いる理由や適切な用い方をしているかを自覚し判断することが難しくなる可能性を感じた。そこで、研究会では、特に問題意識の明確化やデータ収集段階など研究初期の課題に時間を取ることとした。一步、一步、地道に進むことが結局は早道で、現象の新たな見方や援助的なアイデアをもたらすと思われる。

1. 問題意識・研究テーマについて

研究会での発表準備段階でメールのやり取り、電話での話合いを通して、私は有野さんがご自分の実務経験から、服役者が犯罪に至る過程を理解する新たな説明モデルを作成できそうだと

思っておられ、そのモデルを通して犯罪防止教育に役立てようとしていることを知った。実務や服役者、教育について真摯に取り組まれているからこそ、研究関心を持たれたのではないかと感じた。

一方、研究としては多くの課題、疑問を感じた。例えば、

- ①問題意識や実務経験を先行研究や理論との関連で検討する過程が乏しいように感じた。この領域の先行研究は社会学、福祉学、法学、精神医学・心理学、環境や移動、捜査スキルなど広い領域で膨大で詳細な科学的・臨床的データが蓄積されていると考えられるのだが、これら先行研究や知見・経験の問題点の指摘、本研究に期待されるオリジナリティのある結果の予想が不十分ではないかと感じた。
- ②理論的には、犯罪の「自己治癒理論」に示唆を得られたとのことである。しかし、実務経験に裏付けられた具体的データが示されていないため、理論との整合性がみえにくく、感覚的・情緒的に影響を受けられたのでは、と感じた。また、犯罪者の「生きづらさ」という内面に焦点をあてて問題をとらえる方向性もこの理論の影響かと思われる。注意が必要なのは、「自己治癒理論」に影響されて、研究の方向やインタビュー項目、データ解釈もこの理論の検証や当てはめになっていないか、である。さらに、「生きづらさ」のなかにセクシュアリティに関することがないのはなぜかと思った。
- ③先行研究と実務経験の照らし合わせ、検討が少ないため、本研究をする必然性や意義、犯罪関連のどの学問領域に位置づけるのかがわかりにくい。
- ④犯罪そのものの相互作用性の特徴、犯罪者と周囲の人間や環境、捜査関係者などとの特有の相互作用がみえない。私の単純な発想だが、性犯罪は暴力によって弱い立場の被害者を心理的・物理的に強くコントロールして、自分の暴力性・支配性・セクシュアリティの欲求不満を解消するという相互作用があるのではないか。性犯罪に関わる相互作用の特徴の把握は犯人理解、犯罪防止のためにも外せない視点である。データ収集時の相互作用への意識も必要と思われる。
- ⑤犯行への踏み出し、エスカレートしていくプロセスに具体性と説得力が乏しいと感じる。結果としてのプロセス・モデルは「生きづらさを抱えた男」が「コーピングに失敗」し、性犯行に及び、財（快・欲求充足）を得た、という1方向で単純なプロセスである。生きづらさ・フラストレーションが、なぜ性犯罪へと動くのか、軽犯罪から重大犯行までどのようにエスカレートしていくのかなどプロセスが単線的で、変化のダイナミズムがみえにくい。
- ⑥データと本研究で明かにしたいこととの間にずれがあるように感じる。データに密着して根拠をもって読み取れる現象は何か、再検討すれば捉えことが出来るのではないか。

以上のような疑問に対する回答を準備して、有野さんはセッションに臨んで下さった。しかし、検討課題は多く、十分な展開は出来なかった。今後は、繰り返し、犯罪関連の先行研究や理論について十分に検討され、問題意識の明確化に進み、研究テーマ・分析テーマに進んでいただきたいと思います。具体的に言えば、研究する人間・現場の実務者として、(性)犯罪に関する先行研究や理

論、実践経験を踏まえた問題意識がどのようにして生まれ、何を明らかにする必要があると考えておられるのか。実践者として現場での役割、関わりの目的と方法、実践と研究の関係、動機、理論的立場、先行研究とその問題点、現場で改善が必要な課題などである。これらを地道に検討することで問題意識がクリアになり、研究テーマ、分析テーマも定まってくると考えられる。

2. M-GTAに適した研究か

量的研究では捨象されてしまうおそれのある、性犯罪受刑者にとっての性加害の意味に焦点を当てたいと、考えられたとのこと。語り(データ)に密着した分析ができること、「財」を達成しようとする現象がプロセス的性格をもっていること、性加害は本人とその生活環境との相互作用に影響を受けるため、社会的相互作用に焦点を当てることができること、性犯罪受刑者に対する効果的な指導や支援の在り方について実践的な示唆を得ることが期待されることなど、適切な選択理由が示されている。

しかし、これらは研究前に頭で考えたことである。データ収集や分析をしてみて、上記に示したことが各段階で実現できているかどうか、常に吟味しつつ進む必要がある。M-GTA ならではの生き生きとした理解、プロセス、相互作用が目の前に開けてきたか、M-GTAを用いたからこそその研究結果が得られ、「こうだったのか」と論理的にも感覚的にも手ごたえを得られたのか。はじめから M-GTA に適した研究かどうかを判断するというより、着実に地道に研究過程をたどるなかで、M-GTA に適した研究テーマになり、研究結果になっていくのではないだろうか。有野さんのご研究に限らないことである。

3. 研究テーマ・分析テーマ・インタビュー項目・インタビュー協力者

研究テーマ・分析テーマは検討の余地があると思われる。実際に得たデータ内容、インタビュー協力者との関係からみて、現在のテーマが適切かどうかの再検討が必要ではないか。インタビュー項目・インタビュー協力者も問題も、何を何のために明らかにするのか、という問題意識の明確化と関連しているため、この部分だけを検討しても有用ではないだろう。先行研究や実践経験を踏まえて問題意識を明確化することで、これらの課題もクリアになっていくと思われる。

多くの厳しい指摘をさせていただいたが、有野さんは、重要な部署で実践者 = 研究者として活躍しておられる。そのお立場を活かして、ぜひ有意義な研究を進められるように期待している。

【第3報告】

佐々木 秀夫(慶応義塾大学大学院 政策・メディア研究科 後期博士課程)

Hideo SASAKI : Doctor's Course at Graduate School of Keio University

精神障害者小規模作業所の特徴と意義について

—精神障害者小規模作業所運動の第一世代が精神障害者と一般社会を繋ぐ連携を作り出したプロセスから—

The unique and strong points of the small-scaled workshop activities for mental disabilities.

From the view points of the process how pioneer generation of the above activity proceeded the inclusion of mental disabilities to a local community.

1. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究は、精神障害者小規模作業所運動の、特に補助金制度もなく、社会的な偏見が強い特殊な時代背景のなかで活動した、黎明期の実践家が、活動を通じて当事者、家族、病院関係者、地域住民、行政などとの相互作用から、実践家の意識と行動の変化を解明することを狙っている。精神障害は、他障害と比較して、①当時、社会全体に偏見意識が強く、保安対象でもあり、人権意識に鈍感であったこと、②精神病に対する理解は現在よりもはるかに乏しく、家族すら正しい理解ができていなかったケースが多かったこと、③ 高度成長期以降増えたアルコール依存などは医療関係者も正しい理解が一部にとどまっていたこと、④地域定着への制度化が遅れ、病院入院中心主義が展開されていた、というような特殊な状況であった。そのような状況で、精神障害者小規模作業所運動は、「精神障害者を地域に如何に定着させるか」を試みた運動であり、M-GTA の特徴を活用し以下観点での研究を試みたい。

(1) 社会的相互作用を有している点

当時の実践家の当活動における意識と行動について、当事者、家族、地域住民、病院関係者、行政など多くの関係者との社会的相互作用の観点から解明したい。

(2) プロセス性を有している点

上記関係性の観点から、実践家が活動を通じてどのように意識や行動が変化するのか？当事者、および関係者との関係性の変化や行動への影響の変化・プロセスを解明したい。

(3) 本活動の特徴と意義が、現代の社会問題解決に活かさればと期待している。

2. 研究テーマ

精神障害者小規模作業所の特徴と意義について — 精神障害者小規模作業所運動の第一世代が、精神障害者と一般社会を繋ぐ連携を作り出したプロセスから —

(1) 研究の背景

日本の精神医療は、1950 年代半ば以降、欧米諸国で進められた地域化とは逆に、精神病床数・入院患者ともに急速に増加し、病院入院主義の道を進んだ。1960 年代には向精神薬による薬物療法が主流になり、一部では、地域精神医学、生活臨床的な取り組みもなされたが、結果入院中心の医療主流の時代が続いた。

身体・知的障害分野は、身体障害者雇用促進法(1949 年)、精神薄弱者福祉法(1959 年)施行と、社会復帰や就労支援に立った法整備・制度化が進められたが、精神障害者は、精神衛生法(1950 年)のもと、医療・保護政策が続き、制度面でも身体・知的障害と比較し遅れた状況であった。

小規模作業所運動は、養護学校の主に知的障害の卒業生が地域で働き・暮らす場として 1969 年名古屋のゆたか作業所でスタートし、その後養護学校教職員や家族、一般市民の手で全国的に展開された。精神障害者小規模作業所運動は、この心身障害者作業所運動に約 10 年遅れスタートした。心身障害者作業所運動から派生して生まれたもの、1960 年代より結成されつつあった精神障害者家族会を母体とするものなどに分類される。

日本で最初の精神障害者小規模作業所は、あさやけ第二作業所(東京都小平市、ときわ会設立)である。当時、小平保健所管轄区で、閉塞感漂う精神医療を変えるために、保健師、福祉事務所ワーカー、精神科医師、病院ケースワーカーからなる、横断的な地域精神医療を検討する場として「小平・東村山業務連絡会」が誕生し、当連絡会が、すでに心身障害者作業所を運営していた、ときわ会に要請し 1976 年 10 月に開所した。同時期、まいづる共同作業所(1977 年、京都府舞鶴市:まいづる福祉会)、あけぼの作業所(1977 年、京都府:きょうかれん(京都府家族会))、峰山共同作業所(1974 年、京都府:よさのうみ福祉会、知的障害者と混合した形でスタート、後に精神単独に分離)などが誕生した。

当時、入院収容主体の精神医療において、退院後に地域で日中暮らす場、働く場としてスタートした精神障害者小規模作業所は、財政面、実践面で試行錯誤の連続であった。こと財政面では、小規模作業所自体、国の法定外事業の位置づけでスタートし、地方自治体ごとに助成金制度が創設されたが、精神障害は対象とされず、補助金なしのスタートをきらざるを得なかった。精神障害者小規模作業所への助成は、東京都で 1981 年 12 月に補助金交付制度創設され、以降、全国に拡大した。地方自治体により、補助金交付額に大きく差があったものの、補助金制度拡充に伴い、1980 年～90 年代に精神障害者の小規模作業所は全国に拡大し、その数は自立支援法が施行された 2006 年時点で、1600 箇所以上(身体・知的障害者の小規模作業所も含めると 6000 箇所以上)に拡大した。小規模作業所は、養護学校卒業生や精神科病院退院者などの重度な障害のある人びとに対し、現実的な働く場を提供し、日中生活を送る場・働く場として、重度障害者や精神障害者の地域定着に大きな役割を果たした。

2006 年に施行された自立支援法で身体・知的・精神障害の 3 障害は統合された一方、従来制度の事業を 2011 年末までに移行することが義務付けられ、小規模作業所は、同法の就労支援給付系事業と市町村地域生活支援事業の地域活動支援センターへ移行を選択することとなった。その後、総合福祉法のなかで、就労支援、計画相談などへの制度に統合された。

(2) 学術的な意義

他障害と比較して「強い社会的な偏見」、「病への乏しい理解」、「病院入院主義」、「地域化にむけた制度面の遅れ」など特殊な背景を持つ精神障害者の地域定着に大きく貢献し、1700 箇所まで広く拡大した、精神障害者小規模作業所運動に着目し、その特徴と活動の価値が何で、どのよう

にして作られたのか？を解明し、応用展開できないかを考えることに意義があると考え。そのなかで、補助金制度がなく、地域理解が乏しかった、極初期の厳しい時代に当運動に関わった第一世代の、形成のプロセスと特徴を解明することが、本活動を解明する上で、取り組む意義があると考え。

(3) 先行研究

1969 年ゆたか作業所が日本初の小規模作業所として、その後の、きょうされん発足や、精神障害始め他障害分野を対象とした小規模作業所づくりに大きな影響を与えた。樫村、渡辺・後藤は、ゆたか作業所はじめ愛知地区の障害者運動を取りあげ、高度成長期の社会運動・高度成長を背景にした社会世相、経済力、革新自治体成立などとの繋がり、障害者運動と小規模作業所運動を論じている。同様に田中耕一郎の戦後障害者運動に関する研究では、1960 年代の障害者運動について「高度成長期に物質的性格を帯びた展開を見せ始めるこの時期に、既にアイデンティティを含めた価値問題を中心的な争点に据えており、日本では主に住民運動に表現された新しい社会運動の特徴である脱物質主義の思想性を先取りしていた」と論じている。一方、田中英樹は、戦後日本の精神医療の「医学モデル」に補完的な「公衆衛生モデル」から 1988 年の精神保健法の制定以降、統合的「生活モデル」に新たにパラダイム転換を図る上で、小規模作業所の発展が大きく貢献していることを述べ、更に NPO やボランティアグループなどによる小規模作業所活動などの「民間活動」の変遷と意義について論じている。また、藤井は、小規模作業所運動の特筆すべき点として、施策面で遅れていた精神障害者を社会の表舞台に登場させたことを挙げ、その後の社会福祉施策に少なからず影響を及ぼしたと指摘している。その他小規模作業所の精神障害者の精神医学的な効果を検証したもの(黒田、秋元、東)、精神障害者の小規模作業所に対する補助金制度確立に関する研究(鷹野ら)、小規模作業所の利用者の多面的な効果に関する研究(青木)など多々存在する。また小規模作業所運営団体の記念誌や実践報告誌において、運営当事者や職員による実践報告が数多くなされている。しかし小規模作業所関係者の活動における行動や意識について、社会的相互作用の観点で分析を体系的に行った研究はなされていない。

3. 分析テーマへの絞込み

小規模作業所は法定外事業として、地方自治体の補助金制度の拡充とともに発展した特長がある。精神障害者小規模作業所の補助金制度は、1981 年 12 月に東京都が精神障害者共同作業所補助金交付制度を制定、以降 1980 年代～90 年代にかけて他道府県に補助金制度が段階的に拡充し、それに伴い作業所は全国に急速に拡大した。

本研究では、補助金制度が確立されるまでの 1970 年代後半から 1980 年代前半までの、助成金制度ができる前、或いは極めて小額で、且つ社会的にも当活動が認知されてないなかで、活動を進めた世代を、精神小規模作業所運動の第一世代と定義し、活動の起点となった当世代が活動を進めたプロセスに注目し、「精神障害者小規模作業所運動第一世代が精神障害者と一般社会を繋ぐ連携を作り出したプロセス」を分析テーマとすることで、小規模作業所運動が生み出された

経緯と特徴と意義を解明したいと考えた。

4. インタビューガイド

- (1) 小規模作業所運動へ関わった経緯、きっかけは？影響を受けたことは？
- (2) 当時の社会的状況、精神障害者をとりまく環境は？
 - ・当時の当事者の家庭環境、家族の理解、精神科医療はどのような状況？
 - ・当時の地域の理解/偏見は？(現在と比べ) 当時地域に対して感じたことは？
- (3) 活動・仕事に対する取り組み姿勢、利用者とのかかわり方・捉え方について？
 - ・仕事に取り組む上で一番大切にしていたことは？
 - ・利用者への印象、かかわり方とその変化、影響を受けたこと
- (4) 人生にとって活動・当事者との出会い・関わりがどのような意味をもっているか？
- (5) 他障害の運動、家族会、専門職集団との繋がり？
- (6) やりがい・活動の意義は？どういうところで感じた？
- (7) 当時の処遇は？
- (8) 困難、とまどい、苦労は？
- (9) その後の運動発展の過程は？
- (10) 自立支援法移行後の制度化による変化は？
- (11) 世代交代による職員・利用者・社会の意識の変化は？

5. データの収集法と範囲

- (1) 対象範囲の選定：
 - ・1970年代後半から80年代前半の助成金がない(あるいは極めて小額)、初期の数年間に設立された精神障害者小規模作業所の立ち上げに関わった、職員、運営ボランティア、社会福祉事務所ケースワーカー、精神科医師などを対象とした。職員は、「新規で入職者」、「精神科病院 PSW から立上げ・入職者」、「ボランティアからの入職者」に分類された。また作業所の立ち上げは1980年代半ば～後半だが、1970年代に精神科病院のワーカーとして、病院内で「退院就労・地域生活定着事業の推進」、「夜間外来の創設」、「OT の推進」など患者主体の病院改革運動を展開し、後に小規模作業所運動に影響を与えたもの2名も対象に計22名を対象とした。
 - ・対象事業所は、東京都:4ヶ所、神奈川県:3ヶ所、京都府:3ヶ所、和歌山県:1ヶ所。知的障害の作業所から発展した団体:3箇所、市民団体設立:4箇所、家族会:4箇所。
- (2) 方法：
 - ・当時所属していた日本社会事業大学の倫理審査(受付番号:15-0205)取得。所属していた同大学院大島研究室名で書面にて対象団体長に主旨要請実施。
 - ・予め用意したインタビュー項目を中心に対象者の語りを妨げずに自由に情報を引き出す半構造化面接型調査法で実施した(インタビュー時間:60分～3時間20分)。対象者同意のもとICレコーダーにて録音。

6. 分析焦点者の設定

財政面の裏づけがなく(地方自治体の精神障害者小規模作業所助成金制度なく(或いは非常に小額で))本活動が社会的にもまったく認知されてない、特殊的背景のなかで、活動を進めたごく初期の世代を、精神小規模作業所運動の第一世代と定義し、精神障害者小規模作業所の立ち上げに関わった、職員(新卒、精神科病院 PSW 経験者、ボランティア経験者)、運営ボランティア、社会福祉事務所ケースワーカー、精神科医師などを対象とした。

7. 分析ワークシート:回収資料①

8. カテゴリー生成(概念の比較をどのように進めたかを具体例を挙げて説明)回収資料②

9. 結果図:回収資料③

10. ストーリーライン:回収資料④

11. 理論的メモ・ノート(どのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか)

- (1) 特徴的な具体例抽出に際し、その意図する意味を、文脈に沿って解釈することに努め、解釈した観点を具体的に記述することに努めた。類似例も同様に意味を解釈し、意味同志の類似性から更に解釈の意図することの言語化を試みた。
- (2) 現象特性
吸い込まれるような、いつの間にか入り込んで行くような状況。

12. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点などを簡潔にまとめてください(できるだけ箇条書きに)

- ・文脈に沿ったオリジナリティある解釈・概念化の難しさを実感(文脈から飛躍/抽象化しすぎる)
- ・分析テーマ/研究テーマの設定の難しさを改めて理解。(どの切り口で抽象度をあげていくかの難しさ、特に思いが入りやすい対象での、研究者としての視点の置き方の難しさを感じる)
- ・M-GTA と他質的研究の使い分けについて。

<文献リスト>

【方法論および研究例】

木下康仁 (1999)『グランデッド・セオリー・アプローチの実践 質的実証研究の再生』弘文堂

木下康仁 (2007)『ライブ講義 M-GTA 実践的研究法 修正版グランデッド・セオリーアプローチのすべて』弘文堂

佐川佳南枝 (2001)『分裂病患者の薬に対する主体性獲得に関する研究 -グランデッド・セオリーを用いた分析』

佐川佳南枝 (2003)『分裂病患者の薬に対する主体性獲得に関する研究 第2報-グランデッド・セオリーを用いて』

【主要先行研究】

加藤正明監修 村田信男・藤井克徳編集(2000)『地域精神保健活動の理解と実際』中央法規出版

黒田隆男 (1986)『共同作業所と精神障害者の社会復帰』障害者問題研究 44 号

秋元波留夫 (1986)『精神医学と精神障害者擁護 -精神科医師の役割-』障害者問題研究 44 号

東雄司 (1995)『授産施設と小規模共同作業所を核とした地域活動(分裂病者の社会復帰—新しい展開)』精神医学 37(1)

鷹野朋実・森田牧子・末安民生・武井麻子 (2014)『東京都における精神障害者共同作業所通所訓練事業等補助金制度確立のプロセス』病院・地域精神医学 57 巻 3 号

藤井克徳 (2006)『小規模作業所の将来展望』リハビリテーション(482), 28-33, 2006-04

林幸男 (1975) 地域衛生相談員と地域精神衛生活動 公衆衛生 39 巻 11 号

池末亨 (1995) 精神障害における障害の理解と福祉施策 精神障害者共同作業所の福祉的アプローチについて 月間福祉 95 年 7 月号

障害学研究会中部支部会(2015)『愛知の障害者運動 実践者たちが語る』現代書館

田中英樹 (2000)『統合的「生活モデル」の確立をめざして』精神障害者とリハビリテーション Vlo4. no2

田中英樹 (2002)『民間活動の意義と歴史』精神障害者とリハビリテーション Vlo6. no2

青木聖久 (2007)『精神障害者小規模作業所の現状と魅力ある方向性への一考察 -愛知県精神保健福祉センター「地域精神保健医療福祉対策研究会」での取り組みを通して』日本福祉大学社会福祉論集第 117 号

渡辺克典、後藤悠里 (2011)『中部圏の障害者運動 - 1960 年代から 1980 年代のゆたか福祉会、わっぱの会、AJI を中心に』

『厚生白書・厚生労働白書』

共同作業所全国連絡会 (1998)『共作連全国大会基調報告集 1978-1997』

菅生 紀 (1998)『菅生 紀 遺稿集』

全国精神障害者家族会連合会 (1997)『みんなで歩けば道になる全家連 30 年のあゆみ』

社会福祉法人よさのうみ福祉会(2014)『法人 30 年のあゆみ』

会場等での質問

佐川先生から、スーパーバイズの際、概念生成においてすぐに指摘をすると変更する、安易に概念生成をする傾向があった旨、指摘を頂戴した。学問領域的には？との質問を、スーパーバイズ時からも頂いた。また、インタビューデーターの中で説得力のある語が多く、そのデーターの持っている力を活かすための、工夫が必要である、もったいないとのご指摘を頂いた。会場からも同様に、過去の貴重な体験や状況を語ったデーターをより活かしたほうが良いとのご指摘を頂いた。木下先生からは、結果図のすべてを入れ込むのが良いのか？全部をごっちゃにせず、当時の社会背景・課題を入れ込んだうえで、第一世代にとって、何がどうすることにより当時の課題を解決したのかなど、データーの裏打ちのもと噛み砕き、分析テーマの設定を絞り込む必要がある。日本の社会の歴史的な MGTA 研究となる、その際に分析焦点者はインタビュー時間までを入れ込み(その時代経験をした人が今にいたるまで)、分析テーマを考えると良いとアドバイスを頂戴した。

感想

M-GTA を今回初めて取り組み、佐川先生のスーパーバイスのもとで、概念生成の難しさ、「オリジナリティのある抽象化された概念生成」の難しさをまずは実感しました。また、スーパーバイズ頂きご指摘・修正し、発表を迎え、会場で、木下先生から、分析テーマの設定の絞込みの観点について、貴重なアドバイスを頂き、この一連の流れから、今後の方向性が自分なりに少し見えてきた感があり、感謝しています。さらに、データーを活かすことに関し、ご指摘を多く頂戴し、歴史的証言や貴重な語りが多く含まれているデーターそのものを活かした論文作成が、MGTAの結果・考察を裏打ちできる形で提示できればと考えています。「集中的にスーパーバイスを受け思考的軌道修正を繰り返す」、「(その段階では最大限(だが、まだ不十分なレベルで))発表を行う」、「ご指摘を頂戴する」、という一連の経験は、今回私にとって非常に意味があったものと、機会を与えていただき、ご協力いただいた、佐川先生はじめ関係者・会場の皆様に感謝申し上げます。やっと M-GTA の一步が理解できた感で、ご指摘内容をもとに、修正を試み、論文執筆に取り組んでいく所存です。

【SV コメント】

佐川 佳南枝（熊本保健科学大学）

佐々木さんからSVのための資料が送られてきたとき、分析ワークシートのなかのデータの面白さに引き込まれました。一方、それに反して生成されている概念が抽象的、一般的な概念が多く、データが活かしていないことを非常に残念に感じました。

私が佐々木さんとのやり取りのなかで最初に問うたのは、なぜエスノグラフィーやライフストーリーではなくて M-GTA なのかということだったと思います。M-GTA は豊かなデータを概念に代表させ、個別のストーリーは後ろにひっこんでしまいます。それだけに概念の洗練とカテゴリーとの関連図が重要になります。が、概念として覚えられ活用していくにはインパクトが薄いと思われました。

今回のレジュメを読むと、第一世代ということで、世代の特殊性、時代背景も大きい要素と思われました。というのも私自身、修士論文において中山間地にてフィールドワークをしていた際に、学生運動の影響を受けた人たちが有機農業や障害のある人、高齢者へのケアに携わるようになり地域の核となって地域を変革していったということをエスノグラフィーで描いた経験もあったからです。ですから佐々木さんの研究においても、時代背景は非常に重要な要素であるように思われました。第一世代の実践の特性やものの考え方、行動、どのような運動だったのか、個別の詳細なデータを活かした記述をした方がいいのではないかという思いがぬぐえませんでした。しかし一方で、概念化、カテゴリー化を行って理論化を目指したいという気持ちも非常によく理解できました。なぜならそれは私自身が直面した問題でもあったからです。

これも私自身の経験になりますが、木下先生が研究代表で行われた科研プロジェクト「ライフスタイルとしてのケアラー（介護・養育）体験とサポートモデルの構築」の成果をまとめた M-GTA モノグ

ラフシリーズ2『ケアラー支援の実践モデル』の第1部第2章では、木下先生が著された第1章の都市部での高齢夫婦間介護と比較する形で中山間地の高齢夫婦間介護をM-GTAで分析し提示しました。その際、どうしてもこの中山間地の地域特性の部分を表現したいと考えました。そのため、M-GTAで理論化しながらも、地域特性やその地で生きる高齢者の生のかたちが見えてくるようなエスノグラフィックな記述を行いました。私としてはかなりチャレンジングな挑戦でした。

佐々木さんの研究について木下先生からは、「歴史的M-GTAにチャレンジしては」というご提案もありました。私もぜひ、M-GTAでの理論化と歴史性、時代性を表現するという課題に佐々木さんに挑戦していただきたいと思っています。それにはやはり分析テーマと分析焦点者について熟考することが最重要課題となってきます。データが魅力的で力をもっていますので、どうかそれを十分に生かせる分析と記述を目指していただきたいと思います。研究成果を拝見できることをとても楽しみにしています。

◇近況報告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード

- (1) 野中 光代
- (2) 愛知県立大学大学院
- (3) 看護学研究科地域看護学
- (4) 知的障害者、肥満、家族

私は博士前期課程1年で、現在研究計画審査・倫理審査を受けているところです。M-GTAについては前期の看護学質的研究の授業で学び、論文を読み、木下先生の著書を読み、勉強中ですが、実際に分析するには研究会に参加させて頂いて様々な方向から体験して、身に付けられるといいかと思い、1月に初めて参加しました。

研究会に参加して様々な学びがありました。

- ・「分析焦点者」を成功例で絞った場合の対極例の考え方。一般化を目指すための対極例の問い。
- ・「この結果は誰がどのように使うのか？」の視点。
- ・「現場での豊富なデータ」をインタビューにも活用する。倫理的にクリアできなければ明記する。
- ・「何が問いで何がわかったことなのか」研究の一貫性、分析テーマへの絞り込み。
- ・「分析テーマは入り口」であり、「最初は想定していなかったが、結果としてこんな広がりのあるものであった」は結果である。
- ・「明らかにしたいプロセスは何か？」

・「結果の一般化」一般的過ぎず、限定された範囲ならではの結果が出るような抽象度。

実際の M-GTA の分析結果の、発表者とスーパーバイズの先生とのやり取りやフロアからの指摘は、聞いていて大変参考になりました。分析が進んだら是非発表者に応募してみたいです。ありがとうございました。

.....

(1) 増田 昌幸

(2) 東京工業大学大学院 社会理工学研究科博士後期課程

(3) 経営学

(4) 人材と組織

社会人大学院生として、学びはじめて 10 年以上がたちました。修士課程を終えてから、一時中断をはさんで、現在は博士後期課程に進学して学んでおります。

わたしの専攻は経営学で、人材とか組織に関心を持って研究しています。そういうと聞こえは悪くないのですが、実情は「研究」という高い山の入り口で、ウロウロしている状態で、研究ができておりません。というのも、修士論文こそなんとか執筆したものの、とても十分とはいえず、いまになって論文執筆のために不可欠な研究の方法論を一から学んでいるのです。そのような状況ですので、論文執筆にはまだ多くの時間がかかりそうですが、さいわい働きながら学ぶ社会人ですので、就職の心配がいきません。地に足をつけてしっかりと取り組みたいと思っています。

.....

◇M-GTA 研究会第 79 回定例研究会のお知らせ

日時:2017 年 3 月 18 日(土) 13:00~18:00

会場:清泉女子大学 2 号館 4 階 240 教室

.....

◇編集後記

春一番も吹き、春を感じられる日も多くなってきました。次回の定例研究会は、五反田の清泉女子大学で行われます。各方面からもアクセスも良いですので、ぜひご参加ください。竣工 100 周年を迎えた本館(旧島津公爵邸)を中心とした歴史あるキャンパスに是非お越しく下さい。(田村)